

I. 宗教改革が美術に与えた影響について

1. 宗教改革について

宗教改革は 16 世紀に、ローマ＝カトリック教会を批判したマルティン・ルターに始まるキリスト教の改革運動のことである。当時のローマ教皇はレオ 10 世であった。彼はフィレンツェの名家メディチ家の出身で、1511 年、38 歳のころにローマ教皇に就任している。またミケランジェロやラファエロなどのパトロンとなり、ルネサンス芸術の振興に貢献したという功績がある。しかし、レオ 10 世は広く浪費家として知られている。彼の浪費癖が原因で教皇庁は、彼の就任してから数年で財政難に陥ったと言われている。そんな、レオ 10 世だが、サン・ピエトロ大聖堂の建設資金を集めようと「免罪符」を発行し販売した。これは、免罪符を買うとこれまでに犯した罪が免罪されるという名目で販売され、この「免罪符」の売上は教会の大きな収入源となり大聖堂の建設資金に利用された。こうした教会の動きをみたマルティン・ルターは教会の腐敗を批判し「九十五箇条の論題」を教会の門前に貼りだした。これが宗教改革の始まりである。

マルティン・ルターは聖書に書かれていることを守ることが最重要であると考えたそのため、カトリック教会の行っている「免罪符」の販売は聖書で書かれている事ではないので正しい行いではないと批判したのだ。こうした批判に対してカトリック教会は重要な収入源を失うことを恐れて、ルターを異端者であるとみなし破門にした。こうしてキリスト教がカトリックとプロテスタントに分離した。両者は教義、祭司性、信仰の大きく 3 つの点で異なる。教義について、カトリックは教会が作った教義が重要であると考え、一方でプロテスタントは聖書に書かれていることが最も重要であると考えた。祭司性について、カトリックは聖職者のみが聖書の解釈が可能であるとし、プロテスタントは誰もが祭司として聖書を解釈可能であると考えた。信仰についてカトリックは教会が命じる宗教儀式を行うことが重要であると考え、プロテスタントは教会が命じる宗教儀式よりもただ信じる事の方が重要であると考えた。

2. バロック美術について

こうした宗教改革の流れは美術にも大きな影響を与えることとなった。その美術への影響で代表的なものはバロック美術の興隆である。バロックというのは均整、調和のルネサンス様式とは対照的に自由な感動表現、動的で量感あふれる装飾形式が特色の様式である。バロックの原義は「歪んだ真珠」であるとも言われている。

バロック美術とそれ以前のルネサンス美術について比較する。ルネサンス芸術は14世紀にヨーロッパの国で出現した芸術の一形態である。期間は14世紀から17世紀の間である。最大の特徴は、科学とキリスト教の融合であるためリアリズムの感じられる表現となっている。また、対称性が重んじられるということと、色の劇的な変化がないという特徴がある。

一方でバロック美術は16世紀後半にヨーロッパの国で出現した芸術の一形態である。期間は16世紀後半から18世紀半ばまでである。特徴として華麗な細部と人間の感情の表現に重点をおいていることなどが挙げられる。また、非対称でありドラマチックな色彩が使用されているという特徴がある。

当時、プロテスタントは宗教画はモーセの「十戒」に書かれている偶像崇拝禁止という教えに反するものであるとして批判を強めていた。こうした状況の中で、カトリック教会がプロテスタントとの対立で反撃の手段として宗教画を布教に用いた。カトリック教会は、トレント公会議において宗教美術は礼拝の対象でないと定義したのだ。そのため、カトリック教会はなんの気兼ねもなく宗教画を布教に用いることが可能になった。こうした宗教画はダイナミックに、強烈なコントラストで見ている人が引き込まれるように、そして分かりやすいということが重視され、当時ラテン語のみの聖書が読めない人にも一目で聖書の世界観が分かるようにということが意識された。これらは、しばしば宗教的なドラマを効果的に表現したもので、聖書の場面や聖人の物語が劇的に描かれ、その表現は信仰心を喚起する役割を果たした。こうしたバロック様式の浸透は宗教画だけでなく建築、音楽、デザインなど様々な分野に浸透していた。教会にもバロック様式を内部の豪華な装飾に取り入れ、祭壇、彫刻、ステンドグラスなどで宗教的なテーマ性を強調した。

バロック美術の代表的な画家としてはカラヴァッジョ、レンブラント、フェルメール、ルーベンスなどが挙げられる。

カラヴァッジョは「聖マタイの召命」という作品で知られている。聖マタイはキリストの十二使徒の一人で、この作品ではキリストが徴税人であったマタイを弟子に迎えようと声をかけるシーンが描かれている。

レンブラントは「夜警」で知られる画家であり、光と影を操る画家として有名である。この絵画は集団肖像画であり、市民自警団がお金を出し合ってレンブラントに依頼したものでこの時代には市民にも絵画が身近なものとなっていた。

フェルメールは「真珠の耳飾りの少女」で知られる。この絵画にはバロック美術特有のダイナミックさやコントラストの強調などの特徴は見られない。しかし、バロック美術の特徴である人間重視の視点をもつ作品で庶民を描く肖像画であるという特徴は持っている。

ルーベンスは「キリスト昇架」で知られる。ルーベンスの作品は、ダイナミックな動き、鮮やかな色彩などの特徴があることで知られる。

3. プロテスタントの美術（芸術）

プロテスタントはカトリックと分離してできたものであるし、教義も祭司性もカトリックと異なるということから必然的に美術の様式もカトリックのそれとは異なることになる。例えば教会の建築について両者の差異に注目する。カトリックの教会は祭壇をヒエラルキーの一番上においており、そこで祭祀が行われ、礼拝がドラマチックに演出される。そのため豪華な祭壇が用意されていて見ている人にとっても魅力的な作りになっている。一方で、プロテスタントの教会の建築は内装が均質である。それはプロテスタントがもつ独自の思想に由来している。プロテスタントは礼拝と説教は同じくらいの重要さを持ち、司祭と会衆は一体化することが望ましいと考えるため空間の中にヒエラルキーを作ることは望ましくないと考えるのだ。そのため必然的にプロテスタントの教会は平坦でコントラストのないものになっている。

絵画、彫刻などの分野でもカトリックの美術とは異なる動きがあった。上で述べたように、プロテスタントでは偶像崇拜禁止の教えから宗教画は不適切なものであるとみなされ、聖像破壊が起こり、多くの美術品が破壊された。そのため、宗教画はへり別テーマの絵画が多くなった。こうした流れで出てきたのが肖像画と風俗画であった。

こうした宗教改革の流れで大きな影響を受けた美術家は数多く存在する。代表的な例はハンス＝ホルバインである。ホルバインは画家でありながら人文主義的関心をもっており、画家として歩み始めたころのデザインや装飾図にみられる洗練された古典的細部にその影響がみられる。彼は、すぐに優れた画家として頭角を表し、フレスコ画から、肖像画、祭壇画、ステンドグラスのデザインなどを次々と手がけていった。その後、ロンドンでトマス・モアに歓迎され、王との関係を持つモアが政治的影響力を持ち始めると、ホルバインもイギリスの政治と知的原動力の中心に飛び込んで行くことになった。しかし、ここにルターの宗教改革という逆風が押し寄せる。宗教改革により偶像崇拜の禁止が叫ばれ宗教絵画は次々と破壊されていった。こうした状況のなかで宗教画家として出発したホルバインは次第に肖像画に注力するようになっていった。

4. 結論

宗教改革によりキリスト教がカトリックとプロテスタントに分かれた。これと同時に宗教画の需要も変化した。またカトリック教会のなかでもこれまでとことなりよりダイナミックでより明快な絵が求められるようになるなど主題の変化もあった。そしてプロテスタントでは宗教画は必要とされずその代わりに、肖像画や風俗画などこれまでと異なる主題の絵画が制作されるようになっていった。こうした美術の動きはこの後の多様な美術の広がりへの基盤となった。このように、宗教改革が美術にもたらした影響は非常に大きく、後の美術の流れを左右するほどのものであったといえる。

参考文献

THE MET サイト

THE NATIONAL GALLERY サイト

世界史の窓－宗教改革

世界史の窓－レオ 10 世

イロハニアートー西洋美術史を流れで学ぶ（第 12 回） ～ルネサンスの終わり編～

イロハニアートー西洋美術史を流れで学ぶ（第 14 回） ～バロック美術編～

リベラルアーツガイドー【宗教改革とは】意味・思想・その後の時代への影響をわかりやすく解説

シンポジウム「ドイツ美術とプロテスタンティズム」